



空が青いから白をえらんだのです

これは、「くも」という題の詩で、作者 D 君は、仲間の拍手を受け、堰を切ったように話し出します。

「ぼくのおかあさんは、今年で七回忌です」「おかあさんは、体が弱かった。けれどもおとうさんはいつも、おかあさんを殴っていました。ぼくはまだ小さかったから、お母さんを守ってあげることができませんでした。おかあさんは亡くなる前に、病院でこういつてくれました。『つらくなったら、空を見てね。わたしはきっと、そこにいるから』。ぼくは、お母さんのことを思って、お母さんの気持ちになってこの詩を書きました」

（寮 美千子『あふれでたのはやさしさだった 奈良少年刑務所 絵本と詩の教室』西日本出版 2018 より引用）



この本は「想像を絶する貧困、親からの虐待、いじめ、・・・福祉や支援の網からこぼれ続け、加害者になる前に被害者であったような子たち」の姿が描かれています。受刑中の奈良少年刑務所における「社会性涵養プログラム」の一環として著者の「物語の教室」を受け、「詩」という自己表現と仲間の「受けとめ」によって心を開き、変容していった記録です。

「社会性涵養プログラム」は半年間で月に 3 回行い、内容はソーシャル・スキルトレーニング、絵画教室、「物語の教室」の 3 つです。「物語の教室」は、初回—絵本『おおかみの子のはしってきて』の音読、2 回目—『どんぐりたいかい』チャイルド社の集団劇、3～6 回—詩の発表と感想交流という流れです。

この教室で何より大切にされたことは、「すぐに答えられなくても、ちゃんと待ってもらえる」「評価されない」「叱られない」という「安心・安全な場」にすることでした。

少年たちが、虐げられ続け、自分を守るために身に付けた不器用な「鎧」を脱いだとき、心を開いた彼らからあふれでたのはやさしさだったと筆者は綴っています。そして、仲間がつくった詩が、大人にとってどんなに稚拙に見えても、彼らは受けとめる優しさをもっていたといいます。

私は、この本に出会って、人は、あるがままでオーケーな存在だと認めてもらえる安心があつてこそ、初めて成長できるということを、強く感じることができました。

子育て中の保護者の方や、子どもに関わるすべての大人に、ぜひ読んでほしい1冊です。
しかし、涙なしには読めないのも、周りが気になる方は、一人で静かな場所で読むと良い
かもしれません。【Y】

○メルマガで取り上げて欲しい内容やご感想など、下記アドレスにお寄せいただければ嬉
しく思います。(アドレス登録又は配信停止はこちらからどうぞ(^_^))

mailto:kosodatem@pref.iwate.jp。

○メルマガのバックナンバーを当センターHPで閲覧することができます。

アドレスはこちら

「まなびネットいわて」(<http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/>) > 「発行物・刊行物」 > す

こやかメルマガ

これからも、どうぞよろしく申し上げます(^_^)/

【発行】

岩手県立生涯学習推進センター

025-0301 花巻市北湯口2-82-13

TEL 0198-27-4555

URL:<http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/> 「まなびネットいわて」で検索